

ディコロニアル・ジニオロジー
トランスパシフィックの脱植民地的系譜に向けて

Toward a Decolonial Genealogy of the Transpacific

【著者・監訳者】 米山リサ (トロント大学)
YONEYAMA LISA (University of Toronto)

【訳者】 塩原良和 (慶應義塾大学)
SHIOBARA YOSHIKAZU (Keio University)
高橋誠 (慶應義塾大学)
TAKAHASHI MAKOTO (Keio University)

キーワード

トランスパシフィック批評 冷戦 貫戦期 アジア系アメリカ研究 先住民系太平洋研究 結合的批判

Keywords

Transpacific Critique; Cold War; Transwar; Asian American Studies; Native Pacific Studies; Conjunctive Critique

原稿受理日: 2021.2.1.

Quadrante, No.23 (2021), pp.61–70.

「トランスパシフィック (transpacific)」という言葉は、ここ10年の間に様々な領域の学術的著作で広く用いられるようになってきた。地域研究における単一国家的な分析枠組をトランスナショナルな視座から問い直そうという、半球横断的転回の一環として、歴史学、文学、社会学、人類学、そしてエスニック・スタディーズの多くの研究者が、トランスパシフィックなるものを、新たな学問分野を切り開く可能性を秘めた有望な分析枠組だと考えるようになってきた。数多くの書籍、学術会議、ワークショップ、共同研究が、トランスパ

シフィックという題目のもとで行われてきた¹。本誌 (*American Quarterly*) の今回の特集も、編者たちが「批判的トランスパシフィック研究 (critical transpacific studies)」と呼ぶものを土台に、北米における「中国」をめぐるせめぎあうトランスナショナルな諸事象を取り上げている。この言葉がどのように用いられ、何を意味していて、そのように名付けることにどのような意図があるのかについて、必ずしも一貫性があるわけではない。と同時に、トランスパシフィックと名づけることに何か目新しさがあるかのようにみなすことが趨勢となってきたもい

¹ 近年のこうした展開として、以下が挙げられる。Evelin Dürr and Philipp Schourch, eds., *Transpacific Americans: Encounters and Engagements between the Americas and the South Pacific* (London: Routledge, 2016)。Catherine Ceniza Choy, Judy Tzu-Chun Wu による共同編集のもと Brill から出版が開始されたシリーズである *Gendering the Trans-Pacific World: Diaspora, Empire, Race*。そして著者も参加する 2015 年にサイモン・フレーザー大学で創設された Institute for Transpacific Cultural Research (ITCR)。[著者自身が提唱する批判的方法論としての「トランスパシフィック」概念の全容については以下を参照。Lisa Yoneyama, *Cold War, Ruins: Transpacific Critique of American Justice and Japanese War Crimes* (Durham NC: Duke University Press, 2016)。本稿は、その序文をもとに、アメリカ研究学会の学会誌 *American Quarterly* の特集号に寄せて書かれた。]



る。この新たな枠組は、新しいマーケット向けに古い問いを新しいパッケージに詰め替えただけのものなのか。それとも、何か異なる新たな認識をもたらすのだろうか。なぜ、太平洋なのか。なぜ、今なのか。

トランスパシフィック研究が人々の耳目を集める理由のひとつに、近年、北米において中国の軍事的・金融的・政治的・文化的な力への関心が高まっていることがあるとみなすことも可能だろう。それと同時に、米国やカナダにおけるトランスパシフィックへの関心は、それ以前の冷戦の地政学や知識とも深く結びついてきた。トランスパシフィックと名づけることの新しさ、そして「中国の台頭」をめぐる固執が今日深まってきていることと、それ以前からあった冷戦体制への批判的介入との双方との関係のなかでその言葉を用いることの新しさについて、どのように理解すればいいのだろう。トランス(trans)という接頭語によって看過されてしまう認識があるということとをトランスパシフィック研究が考慮せざるをえないとしたら、どうだろう。そのためにある種のトランスパシフィック研究が、文字通り太平洋を通り越してしまうことで、「二つの沿岸」どうしの地政学的、想像的、あるいは生きられた関係の究明となってしまうとしたら、そこではどのような構成要素・実践・問いが知識生産のダイナミクスから零れ落ちているのだら

う。

トランスパシフィックと「太平洋」への転回が、何か新しいことを示しているのであれば、トランスパシフィック的分析なるものを出現させたのかが何なのかを突き止め、トランスパシフィックというレンズなしでは見えない、新たな問いや感受性とはいったい何なのかについて考えなければならない。実際のところ、様々なディシプリンに属する研究者たちが長年、太平洋地域を、暴力的な接触・交流・非対称性が出現する重要な空間として探究してきた²。批判的方法論としての「トランスパシフィック」^{パシフィック}とは、太平洋と呼ばれているにすぎない場の横断や、あるいはその内部で起こる移動や接触を言い換えただけではない何かを意味するはずだ、と主張したい。必要なのは、知・非知の対象として太平洋という空間が構成されてきた、特定の地理-歴史(geohistory)的条件を明らかにすることである³。トランスパシフィックと／または太平洋的転回の意味を十分に捉えるためには、その出現の経緯を精査し、それが明らかにしたり隠蔽したりするかもしれない介入や対立について、考えなければならない。私は、トランスパシフィックのデコロニアル(decolonial)な系譜について論じる——それは、アジア・太平洋諸島における米国の軍事的・植民地主義的プレゼンスに対するトランスナショナルなアジア／アメリカン批評として発

² 知識生産の最も確立された制度的な場が太平洋研究(the Pacific Study)なのはもっともである。本論文の目的に鑑みて、ここでの考察はネイティブ太平洋研究(the Native Pacific studies)に限定する。太平洋諸島に関する地域研究の知識生産のあり方から批判的に距離をとった力強い研究として、Teresia K. Teaiwa, 'bikinis and other s/pacific n/oceans', *The Contemporary Pacific* 6.1 (1994): 87-109 を参照。ネイティブ太平洋研究と米国研究を交差させる、多数の重要な著作が出版されてきた。とくに Keith L. Camacho, *Cultures of Commemoration: the Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2012); J. Kēhaulani Kauanui, *Hawaiian Blood: Colonialism and the Politics of Sovereignty and Indigeneity* (Durham, NC: Duke University Press, 2008); Anne Perez Hattori, *Colonial Dis-Ease: US Navy Health Policies and the Chamorros of Guam, 1898-1941* (Honolulu University of Hawai'i Press, 2004); Vincent M. Diaz, *Repositioning the Missionary Rewriting the History of Colonialism, Native Catholicism, and Indigeneity in Guam* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2010)。アジア系米国人の歴史の領域からの貢献としては、例えば Gray Y. Okihiro の三部作の一つである *Island World: A History of Hawai'i and the United States* (Berkeley: University of California Press, 2008); Augusto Espiritu, "Inter-Imperial Relations, the Pacific, and Asian American History", *Pacific Historical Review* 83.2 (2014): 238-254。マーシャル諸島の歴史における日米間帝国主義という独創的な視座については、Greg Dvorak, "Who Closed the Sea? Archipelagoes of Amnesia between the United States and Japan", *Pacific Historical Review* 83.2 (2014): 350-372。

³ Paul Lyons and Ty P. Kāwika Tengan, eds., "Pacific Currents", a special issue of *American Quarterly* 67.3 (September 2015) が同様の議論を取り上げている。

話され、再分節化されて (rearticulate) きたものである⁴。そうすることで、トランスパシフィックな結合的批判 (conjunctive critique) を以下に紹介していく⁵。それは、貫戦期 (transwar)、間帝国 (interimperial) の編成体としての冷戦体制にとって代わるものを考えるための批判的方法論として、私がこれまで提唱してきたものである。

私は、第二次世界大戦から冷戦の始まりという移行期の構造的な遺産との対峙を余儀なくさせるという点で、新たな世紀におけるトランスパシフィックの分析視覚はとりわけ重要だと考える。大日本帝国に植民地化ないし占領されていたアジア・太平洋諸島の広範な領域は、この貫戦期に再編され、米国の地政学的な主導権確保のために動員され、それとともにこの地域はヨーロッパの公式の植民地支配の退潮を目撃することになった。米国の覇権は、軍事的支配とアジア・太平洋諸島における在外領土の運営——これは19世紀末のスペイン帝国とフィリピン共和国に対する戦争にまで遡ることができる——なくしては、達成できなかっただろう。だが20世紀半ばにおける米国の優位は、解放・権利・自由とか、世界の民主主義のための米国の犠牲といったレトリックを通じた統治能力によって正当化されているのも事実である。米国の冷戦研究者が異口同音に述べるように、グローバルな冷戦対立のなかで、その多くがやがて新興国民国家となる第三世界諸国を動員するために、公式の植民地主義

と白人至上主義を否認することが米国の外交政策の最も緊要な懸案事項となった⁶。

しかし、これらの冷戦研究においてあまり認識されていないのは、「解放のための帝国」、とりわけレイシズムと植民地主義の否認という米国のレトリックの力は、米国の「善い戦争 (good war)」という語りを通じて日本の降伏後の復興を喧伝することなしには、効果を発揮しなかったという点であろう。「善い戦争」のナラティブとは、戦前の日本は近代に遅れた国であり、米国によって軍事的に制圧され、その指導のもとに再生してはじめて、その自由の理念を受容する潜在能力を培うことができた、というものである。貫戦期にもたらされた地域研究の知見は、日本に対するそのような認識に学術的な信憑性を与えた。ダグラス・マッカーサー元帥の指揮のもと——米国の占領下における他の民主的改革とともに——本土の「日本人女性」がいかにして解放され権利を与えられたか、という物語が広められたのもこうした文脈においてであった。換言すれば、この貫戦期という転機において、その後の「米国の世紀」のための抜本的な認識の転換が求められており、だからこそ大西洋側の脈絡ではおよそ理解できないようなかたちで、非白人・非西洋であるかつての敵の解放とリハビリに関する知が特に重要なものとなっていたのである。日本人女性の解放という「善い戦争」の語りが、この新たな世紀のはじまりにおける米国の対テロ戦争の主張を正当化し続けていることは、そう

⁴ 私はアジア・太平洋諸島における米国の軍事的プレゼンスに注目しているが、トランスナショナルなアジア／カナダ批評も同じように、サブ帝国主義国家としてのカナダがいかにしてトランスパシフィックな冷戦秩序に深く関与していたかを明らかにしうる。カナダ固有の地理-歴史的軌跡のゆえに、アジア／カナダ批評はより根源的に「アジア系カナダ」がいかにして英国、中国、日本、そして米帝国間という新旧帝国間の大陸間関係によって形成されてきたかを解明することができる。

⁵ Lisa Yoneyama, *Cold War, Ruins: Transpacific Critique of American Justice and Japanese War Crimes* (Durham NC: Duke University Press, 2016)。こうした方法論的問題についての数多くの啓発的な対話してくれた Lisa Lowe 氏と Yèn Lê Espiritu 氏に特別に感謝したい。[以下の共著を参照。Yoneyama, Lisa, Yèn Lê Espiritu, and Lisa Lowe. "Transpacific Entanglements", in Cathy J. Schlund-Vials, ed., *Flashpoints for Asian American Studies* (New York: Fordham University Press, 2018), 175-189.]

⁶ 例えば、以下を参照。Melani McAlister, *Epic Encounters: Culture, Media, and U.S. Interests in the Middle East, 1945-2000* (Berkeley: University of California Press, 2001)、Christian G. Appy, "Introduction: Struggling for the World", in *Cold War Constructions: The Political Culture of United States Imperialism, 1945-1966*, ed. Christina G.

したトランスパシフィックな知識生産の持続力と、米国のグローバルな優位を維持するうえで、アジアと太平洋が言説的・地政学的にいかに必要不可欠でありつづけてきたかを示唆する⁷。しかし、この米帝国とその編成に関する言説と大日本帝国との本質的な関わりについては、ほとんど注意が向けられてこなかった。

貫戦期の、そしてトランスパシフィックなつながりに関する結合的批評が明らかにするのは、20世紀半ばの日本との関係を踏まえて検証しない限り、米国という冷戦期の帝国を適切に把握できないという点である。結合的批評はそれだけではなく、日本の植民地帝国とその帝国主義的実践が、近代、人種、そして新世界へのヴィジョンにとってどのような意味があったのかに関する知の生産を批判することも余儀なくする。それに加えてここで重要なのは、貫戦期の、そしてトランスパシフィックなさまざまな絡まり合いが可能にし、維持してきたものが何であったのかについて、この方法論が明らかにしてくれることである。日本の帝國的近代を第二次世界大戦後の米国の正義の引き立て役とすることで、米国は台湾、韓国、そしてフィリピンといったアジアの独立国を client-states として自由市場のネットワークへと動員することに成功し、超国家的資本の軍事的安全を維持した。また、こうした空間を創りだすことが、中国共産党の影響力の封じ込めを目指すものであったという点で、このトランスパシフィック

な冷戦編成は、第二次世界大戦後の中国——それを脅威とみるか、好機、希望とみるか、あるいはその主権的存在を無視するか否かにかかわらず——とアジア間・アジア内部の関係を決定づけることにもなった。そうした帝国間の、そしてサブ帝国間の関係によって生み出された米国という「自由の帝国」は、同時に「基地の帝国」として出現した。米国の在外基地システムは基地リース合意あるいは再植民地化によって先住民の土地を接收し、治外法権の空間を生み出し、現地の政治・社会・経済生活に統治的影響力を及ぼしてきた⁸。こういった貫戦期の特殊性や結びつきに注目するようなトランスパシフィック批評は、冷戦の帝國的編成により、錯綜しつつ決して一様ではないかたちではあったが、アジア太平洋各地において徹底した脱植民地化が封じ込められてきたことを明らかにするのである。

第二次世界大戦後の冷戦期のポストコロニアル状況における植民地的なものの継続をおそらく最初に批判したのは、Elaine Kim と Chungmoo Choi による *Dangerous Women: Gender and Korean Nationalism* (1998) であろう。トランスパシフィックの地政的ダイナミクスと歴史的堆積に批判的なまなざしを向けることで、Kim と Choi は日本の植民地主義、米国の冷戦期の軍事安全保障帝国主義、そして独立後の韓国ナショナリズムとのあいだにある、貫戦期の、そしてトランスパシフィックな

Appy (Amherst: University of Massachusetts Press, 2000), 1–8.

⁷ この点については、Lisa Yoneyama, “Liberation under Siege: U.S. Military Occupation and Japanese Women’s Enfranchisement”, *American Quarterly* 57.3 (2005): 885–910 を参照。[日本語では「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領——日本女性のメディア表象と「解放とリハビリ」の米国神話」『思想』(955号)を参照。] Jodi Kim は *Ends of Empire: Asian American Critique and the Cold War* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2010) において、こうした過程を「ジェンダー化された人種的復興」と特徴づけた。内戦、暴動鎮圧、そして戒厳令という「解放の帝国」として米国のもうひとつの側面を考察したものとしては、Heonik Kwon, *The Other Cold War* (New York: Columbia University Press, 2010) も参照。

⁸ Catherine Lutz, “Introduction: Bases, Empire, and Global Responses”, in *The Bases of Empire: The Global Struggle against U.S. Military Posts* (New York: New York University Press, 2009), 1–44, Gavan McCormack, *Client State: Japan in the American Embrace* (London: Verso, 2007), Chalmers Johnson, *The Sorrows of Empire: Militarism, Secrecy, and the End of the Republic* (New York: Metropolitan Books, 2004), そして Michael Lujan Bevacqua, “The Exceptional Life and Death of a Chamorro Soldier: Tracing the Militarization of Desire in Guam, USA”, in *Militarized Current: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific*, ed. Setsu Shigematsu and Keith L. Camacho (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2010), 33–61。

結びつきについて初めて英語で分析した。二人は簡潔に、次のように明言する。「20世紀の韓国は日本の植民地主義と新帝国主義的支配、とりわけ日本の植民地支配に由来する政治的・社会的インフラストラクチャーにその体制を上書きしたアメリカのヘゲモニーという、幾層にも重なるパリンプセスト構造である。……第二次世界大戦後に米国の軍事的装置が直接に実装されたため、韓国は、他の旧植民地と同じように、真の意味で脱植民地化する機会をもたなかった」⁹。KimとChoiの研究は、コリアン研究とコリアン系アメリカ研究の研究者の対話の所産として、それまで米国のエスニック・スタディーズが地域研究と分断されることによって続いてきた、知識の選択的消去と規律化をあからさまにしたのである。「コリア」——太平洋の向こう側にある場であり、ディアスポラのある場でもある——を、国民国家の枠組みにとらわれた静態的な研究対象としてではなく、消去と分断の場として扱うことで、KimとChoiの編著はアジア研究と米国研究の学問的・地理的境界を越える批判的トランスナショナル・フェミニスト認識論が台頭する嚆矢となった。重要なことは、このトランスパシフィックの系譜学が、米国中心の研究から目をそむけず、トランスパシフィックな米国の帝國的編成に関するアジア系アメリカ批評を最前線に押し出した点である。

最近出版された Janet Hoskins と Viet Thanh Nguyen による編著 *Transpacific Studies: Framing an Emerging Field* (2014) は、「トランスパシフィック研究」を、新たなアジェンダを追究しうる新しい学問領域として

明確に位置づけている¹⁰。この文脈におけるトランスという接頭語は、人々、資本、文化的生産物、労働力が移動し接触する地理的空間として太平洋を捉えようとするものである。Hoskins と Nguyen は、グローバル資本主義の最新段階にある太平洋諸地域に関する対抗的ヴィジョンを明らかにした Rob Wilson と Arif Dirlik といった研究者たちの成果を継承している。もちろん、決定的な違いは、後者にとって日本がアメリカによってリハビリされたトランスパシフィックなパートナーであるのに対し、前者では中国、とくに東南アジアにおけるその軍事的・政治的・経済的影響力の増大に関心を寄せていることである。その意味でこの編者たちは、中国がグローバルな存在感を強め、地政学的ダイナミクスを変容させつつある私たちの時代における、新たな冷戦的感覚を反映している。寄稿者の一人が簡潔に述べているように、Hoskins と Nguyen による共同研究は、「「トランスパシフィック」という言葉を独自に解釈し、「環太平洋 (Pacific Rim)」という、古く、今では時代遅れとなった言葉の代わりとして」¹¹提起するのである。

その「序章」で、Nguyen と Hoskins は潜在的な研究対象として太平洋の各所で日常的に見出される交流や旅の実践を取り上げ、トランスパシフィック研究の輪郭を定めている。例えば著者たちは、一筋縄ではいかず予測不能なトランスパシフィックな実践の重要な例として、〔移住者による〕仕送りを強調する。それにより、帝國的欲望の対象ではない「コンタクト・ゾーン」(p.2)としてのトランスパシフィックという視座を提起し、またトランスパシフィックの

⁹ Elaine Kim and Chungmoo Choi, introduction to *Dangerous Women: Gender and Korean Nationalism*, ed. Elaine Kim and Chungmoo Choi (New York: Routledge, 1998), 3.

¹⁰ Viet Thanh Nguyen and Janet Hoskins, "Introduction: Transpacific Studies: Critical Perspectives on an Emerging Field", in *Transpacific Studies: Framing an Emerging Field*, ed. Janet Hoskins and Viet Thanh Nguyen (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2014), 1-38. 以下、同著から引用。

¹¹ John Carlos Rowe, "Transpacific Studies and the Cultures of U.S. Imperialism", in Hoskins and Nguyen, *Transpacific Studies*, 135.

歴史を「征服、植民地主義、対立によってのみではなく、（ローカルな認識論や行動にもとづく）オルタナティブな語りによっても」（p.3）定義しようとする。さらに Nguyen と Hoskins はトランスパシフィック研究に「クィア的パースペクティブからの考察を含めよう」（p.16）と提案することで、従来の研究からの差異化をはかる。クィア・ディアスポラの分析は、トランスパシフィック研究の専売特許というわけでは必ずしもない。むしろ他の地理的領域においても、出自という概念、移動・コミュニティ・帰属の根源的テロス (telos) を揺るがし、豊かな議論を生みだしてきた。しかし Nguyen と Hoskins によれば、クィア・ディアスポラの展開がとくに重要なのは、それが様々な資本主義的想像をかきたてる異性愛規範的な前提や範疇を揺るがすだけでなく、安定、快適さ、そして「学問の本拠地」（p.16）の真正さを追い求める学問的欲望もまた問いなおすからである。クィア・ディアスポラは分析であると同時に生きた行為者であるとみなされ、そのどちらもが再生産と資本主義的生産を「拒む」のだとされる。このように、流通・取引・移動性／非移動性の多方向性と矛盾した波及効果を調査し理論化するために、Hoskins と Nguyen はエスノグラフィにもとづいた分析視点を提供する。

Nguyen と Hoskins よりも以前に、Naoki Sakai と Hyon Joo Yoo は *The Trans-Pacific Imagination: Rethinking Boundary, Culture, and Society* (2012) において、米国研究とアジア研究というふたつの地域研究における国家所与的存在論 (national ontology) を明らかにし問いなおすために、トランスパシフィックという言葉を用いた¹²。Sakai と Yoo によると、地政学的配置としての東アジアは米国の帝国的支配と不可分かつ密接に結びつけられてい

る。それはまた、日米同盟と旧植民地諸国の動員の成功によって可能になっている。Sakai と Yoo が構想するトランスパシフィック研究は、ネイション、ナショナリズム、国家所与的存在論、そして何より、〈普遍的な西洋〉と〈特殊なそれ以外〉という二分法を支える前提を脱構築しようとしている。Sakai と Yoo は、そうした想定が20世紀中葉にトランスパシフィックにおいて次第に広がったとみなす。かれらによれば「トランス-パシフィック的ヘゲモニーに関して疑う余地なく明白なのは、西洋とその他という二分法の作用である」（p.6）。さらに、太平洋におけるナショナリズムと国民形成は、米国主導の地政学的ダイナミクスにとって不可欠であった。かれらの見解では、そうしたヘゲモニーに対抗しようとするナショナリストの企てでさえ、西洋に対する同一化と承認という枠組みに囚われている。Sakai と Yoo の目的は「東アジアを想像する支配的なあり方を乗り越える、地域研究の新たなパラダイムとして、トランスパシフィックを構想すること、そして新帝国主義的な構図を超えた、新たな地域編成のかたちを見出すこと」（p.37）である。こうしてかれらの研究は、知識生産の地政学的ダイナミクスを明らかにし、問いなおす言葉として、トランスパシフィックを提案しようとする。

Sakai と Yoo は、地域研究によるトランスパシフィックというものの取り込み、そしてその逆方向の取り込みの双方に警戒を促す。トランスパシフィックに触発された研究対象の多様化や多元化は、地域研究における既存の前提や範疇に挑戦するものでは必ずしもなく、むしろそれらを固定化すると論じつつ、Sakai と Yoo は地域研究における旧来の範疇、認識論的多元主義、そして東洋-西洋の二分法を問題化しようとする。その意味で、かれらが用いるト

¹² Naoki Sakai and Hyon Joo Yoo, "Introduction: The Trans-pacific Imagination – Rethinking Boundary, Culture, and Society", in *The Trans-pacific Imagination: Rethinking Boundary, Culture, and Society*, ed. Naoki Sakai and Hyon Joo Yoo (Hackensack, NJ: World Scientific, 2012). 以下、同著から引用。

ランスパシフィックという概念は、Hoskins と Nguyen が最近になって提示した、米国を拠点とした学問に対する明らかな対抗的知識生産の場としてのランスパシフィック研究、という定義とは異なっている。Hoskins と Nguyen は自分たちの研究において米国が占める位置について次のように述べる。「ランスパシフィック研究は米国のパワーの重要性を認めるが、アジアと太平洋を前景化する必要性を強調する。そうすることで、ランスパシフィック研究があらためて西洋からの帝国主義的な知的ふるまいとなってしまうこと、つまり対抗的な手法さえもが西洋の人々の主体性の優位を再主張してしまうというような知的ふるまいとなることを回避したい」(p.24)。実際、Nguyen と Hoskins はランスパシフィックという名のもとで東南アジア研究を際立たせようとしており、そのなかで、東アジア中心的、米国中心的な知識生産の双方に警鐘を鳴らす。インターアジア・カルチュラル・スタディーズ研究全般、とりわけ Kuan-Hsing Chen の著作を俎上にあげ、Chen の「方法としてのアジア」という概念を、アジア系アメリカ研究において支配的であったと彼らがみなしている、「「米国を自分のものとして主張すること」(claiming America)の鏡像」だとして、Nguyen と Hoskins は、「東アジアの「サブ帝国」に批判的であることでさえ、知識生産の問題などにおいて、東アジアをアジアと太平洋における主要な行為主体として中心化してしまいかねない」と論じる¹³。

Kim と Choi の編著が出版されて以来、過去20余年にわたり、アジア研究、アジア系アメリカ研究、そしてポストコロニアル研究の間隙について、数多くの力強く学際的な業績が台頭してきた。そうした業績は、ジェンダー化

され、性化され、人種化された米国の牢監的(carceral)政治経済、(新)自由主義シティズンシップ、そしてナショナリズムが、国境を越えた軍事-安全保障の統治性と不均一ながらも不可分に結びついているありさまを明らかにしてきた¹⁴。しかし、インターアジア・カルチュラル・スタディーズに関する指摘のなかで、複数あるはずのアジア系アメリカの軌跡を「米国を自分のものとして主張する」ものだとして、一括りにしてしまうような Nguyen と Hoskins の言い様は、異なる場所で、異なる政治的契機においてなされる介入の混濁性や特異性を消し去ることなく、相互批判的に結びつきながら学問領域横断的・地域横断的な知的プロジェクトを創りあげることが、いかに難しいかを浮き彫りにしている。

不均一だが交差する共起的な権力作用を明らかにできるよう、ランスパシフィックな枠組みが、地理-歴史的に固有なかたちで今も継続する批判的取り組みどうしを関与させることは、どのようにすれば可能なのか。ナショナリズム、新旧オリエンタリズム、新自由主義、そして軍事化された植民地帝国としての米国のあり方を強力に批判してきたアジア／アメリカの介入を損なってしまうことなしに、「アジアと太平洋を前景化する必要性」を主張することは、どのようにすれば可能なのか。

批判的でトランスナショナルなアジア／アメリカ人的認識は、アジアにおける米国の軍事的-植民地主義的プレゼンスを——米本土における国家的暴力や規律化の多様なあり方とに結びつけるかたちで——問題化してきた。アジア／アメリカの認識論は近年、入植者植民地国家としての米国の過去と現在のあり方に対する先住民からの批判に応じるかたち

¹³ Nguyen と Hoskins によれば、Chen の「方法としてのアジア」という概念は、「アジア系アメリカ研究を活気づけているとされるラディカルな対抗的方法のアジアにおける対応物」(p.22)である。

¹⁴ ごく一部を挙げると、Kandice Chuh, Vernadette Vicuña Gonzalez, Laura Hyun Yi Kang, Jodi Kim, Martin F. Manalansan IV, Mini NguyenそしてCathy Schlund-Vials。

で、新たに分節化され、発話されることになった。Setsu Shigematsu と Keith Camacho が編集した共同研究は、「太平洋」が長いあいだ、「横断され、飼い慣らされ、占領され、入植されるべき、開かれた辺境と」見なされてきたことに異議を申し立てた点で先駆けだったといえる¹⁵。横断という認識的暴力によって隠蔽されるのは地理-歴史的条件であり、それは Camacho が別の文脈で簡潔に指摘している。「しばしばステレオタイプとして女性的でか弱いものとしてジェンダー化され、それゆえ男性的な軍事的勢力によって保護される必要があるとされた結果、太平洋の先住民は搾取されてきた。これはとりわけ、米国による戦火、文化的ジェノサイド、環境破壊、土地の収奪、あるいは核実験などの対象となったチャモロ、ハワイ、マーシャルの人々に当てはまる」¹⁶。さらに、Yên Lê Espiritu が「批判的並列 (*critical juxtaposing*)」という方法によって明らかにしたように、米国がベトナム人を「救済し」、東南アジアにおける戦争の終盤にかれらを難民として処遇することになる軍事的経緯の下準備をしたのは、大陸と太平洋にまたがる入植者植民地主義の歴史の多層的な暴力であった¹⁷。

誤解のないように指摘しておくなら、私はトランスという接頭語をめぐる問題を、単に今ある研究アジェンダに他のテーマを付け足すことで解決しようとしているわけではない。私が注目してほしいのは、Camacho が「太平洋諸島民の介入 (Pacific Islander interventions)」と呼ぶものを等閑視したトランスパシフィックと

いう分析枠組みがもつ問題性である。つまり、先住民の認識論、すなわち「太平洋とディアスポラにおける米国の植民地主義的プレゼンス」に促された理論化が等閑視されてきたこと、そして、このような介入により、トランスナショナルなアジア／アメリカの批評がどのようなかたちでこの等閑視という問題そのものに向き合うようになったか、という点である¹⁸。

Vincent M. Diaz の論文 “‘To “P” or Not to “P”?’: Marking the Territory between Pacific Islander and Asian American Studies” は、エスニック・スタディーズという学問領域について、太平洋諸島における米国の植民地主義との関連において異議を申し立てた最初の「太平洋諸島民の介入」のひとつであった¹⁹。Diaz はアジア系アメリカ研究と太平洋諸島研究というふたつの学問分野のあいだの不均等な権力関係に無批判なまま、両者を制度的に結びつけることに対して警鐘を鳴らした。政治の根本的な状況依存性を主張しながらも、差異を備えつつ連携できるという可能性は否定せず、Diaz は次のように論じた。「アジア系アメリカの探求は、先住民系太平洋研究者 (Native Pacific Scholars) が明らかにしようとしている歴史的・政治的葛藤を理解しようとしなければならない。それは、先住民系太平洋研究者がアジアの歴史の特殊性について、それが大陸にいる、そして島々にいる、太平洋諸島先住民をまさに当事者として巻き込んできた米国の帝国主義的事業と深く結びついていた歴史であるがゆえに、理解する必要があるのと同じ

¹⁵ Setsu Shigematsu and Keith L. Camacho, “Introduction: Militarized Currents, Decolonizing Futures”, in Shigematsu and Camacho, *Militarized Currents*, xxxii.

¹⁶ Keith Camacho, “Transoceanic Flows: Pacific Islander Interventions across the American Empire”, *Amerasia Journal* 37.3 (2011): xi.

¹⁷ Yên Lê Espiritu, *Body Counts: The Vietnam War and Militarized Refuge(es)* (Berkeley: The University of California Press, 2014).

¹⁸ Camacho, “Transoceanic Flows”, ix.

¹⁹ Vincent M. Diaz, “‘To “P” or Not to “P”?’: Marking the Territory between Pacific Islander and Asian American Studies”, *Journal of Asian American Studies* 7.3 (2004) 183–208.

ことである」²⁰。Diaz の問題提起は、米国研究、アジア系アメリカ研究、そしてエスニック・スタディーズの研究者のあいだに、本土中心のリベラルナショナリスト的な枠組みが、先住民の主権という問題や入植者植民地主義のもたらした窮状を見落としていたことへの反省を引き起こした。

Candace Fujikane と Jonathan Okamura の客員編集による “Whose Vision? Asian Settler Colonialism in Hawai’i” と題された *Amerasia Journal* の特集は、太平洋諸島民研究とアジア系アメリカ研究の非対称性という政治的・学問的疑義に対する初期の応答のひとつであった²¹。「アジア人入植者植民地主義」の分析を通して、Fujikane と Okamura はアジア系アメリカ研究が米国市民への多文化主義的包摂というモデルに依拠しているがゆえに、先住民による主権を求める闘争を隠蔽してしまうとして異議を申し立てた。そして、アジア人入植者とその政治的・経済的権力がハワイにおける米国の帝国主義的プレゼンスと軍事化に関与し、持続させてきたことを明らかにした²²。より近年では、Iyko Day が米国とカナダの入植者資本主義 (settler capitalism) を支えている、最大公約不可能だが相関的な排除と根絶の論理の結びつきと作用を把握するために、先住民、入植者、移民の三者関係を考察することを提案している。こういった対話は、入植者国家、帝国主義、そして侵略・平和維持・占領などを目的とする海外における軍事的配備といった事象間の諸連関を明らかにすることを通じて、トランスパシフィックのオルタナティブな理論化がさらに発展する可能性を示唆している。

しかしながら、増大する「中国の台頭」への懸念によって刺激され高まったトランスパシフィックな感受性にとっては、太平洋は依然として、その両岸を行き来する資本・労働力・軍隊・文化的生産物などによって「横断されるべき広大な辺境」とみなされている。2016年12月、国際メディアは中国初の航空母艦による太平洋航行をさかんに報道した。中国海軍の艦艇による沖縄諸島間の公海の往来の重要性は、メディアの注目を集めるに足りるものであった。アリューシャン列島から日本本土、そして沖縄からフィリピンへと太平洋海域の北西端を走る冷戦期の「防御境界」(Dean Acheson による)を、中国が突破したかのように見えたのである。しかし、近年の東・南シナ海、そして今日の太平洋における中国の軍事的プレゼンスに対する過剰なまでの懸念によって覆い隠されるのは、編入・未編入領土における米国の大規模な軍備拡張である。

もっとも、太平洋を「横断されるべき広大な辺境」とみなす認識は、「中国の台頭」と太平洋諸島への資本流入の増加や、継続する軍事的植民地化との結びつきを見えにくくするだけではない。先住民の認識論を無化してしまうようなトランスパシフィックの言説は、太平洋諸島先住民の長年にわたる、ヨーロッパと日本の支配に対抗してきた脱植民地化への動きや、米国の帝国主義への異議申し立てを消し去ってしまううえに、沖縄、済州といった島々、そして米国の他の属国の高度に軍事化された地域で激しさを増す反基地闘争もまた、新旧の地理-歴史的なもつれあいに含まれてきたことを覆い隠してしまう。そうしたつながりやもつ

²⁰ Ibid., 184-185.

²¹ この特集は後に論文集として出版された。Candace Fujikane and Jonathan Y. Okamura, eds., *Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai’i* (Honolulu: The University of Hawai’i Press, 2008).

²² Iyko Day は国家-企業型多文化主義という北米本土の文脈において、入植者／先住民という二項対立がしばしば入植者国家における人種化されたシティズンシップ形成の非対称性を隠蔽し、それによって移民が規律化されることを問い質している。Day, *Alien Capital: Asian Racialization and the Logic of Settler Colonial Capitalism* (Durham, NC: Duke University Press, 2016) を参照。

れあい等を等閑視することはさらに、アジア研究、アジア系アメリカ研究、批判的エスニック・スタディーズ、太平洋諸島研究、そして一部の北米先住民研究、アジア系カナダ研究の交流において続けられている対話を、曖昧にしてみよう恐れがある。そうした対話とはすなわち、複数の冷戦構造を単に異なる国家領域や地域に見いだせる、比較可能な等価物としてではなく、そうした構造を北米の大陸内、あるいは大陸の境界を越えた新自由主義的な牢監的政治や、人種化された文化戦争との相互構成的な結びつきの中で問いなおすべく、植民地主義的、新植民地的実践の解明を追求してきた現在進行形の交流や取り組みのことである。

太平洋諸島とアジア／北アメリカの間にある政治的、知的分断線上で起きているこれらの介入や対話が明らかにするように、トランスパシフィックという言葉は、入植者植民地帝国の苦境という、しばしば否認される側面によって憑きまといわれざるをえない。トランスパシフィックという言葉が従来の地理-歴史的構造の産物である限り、それは太平洋諸島の人々とその歴史を長い間等閑視してきた軍事化されたグローバル資本主義とその政治的合理性という、問題含みの地図作成法の遺産を受け継いでいることになる²³。だが、そうした難問は、「西洋」に媒介されない何かを取り戻そうとする地域研究の衝動への回帰や、米国中心主義に対する批判によって解消できるわけではない。たとえそれが「西洋からの帝国主義的な知的ふるまい」への正当な応答であったとしても、である。

Aihwa Ong に倣って Denise Cruz が賢明にも示唆したように、仮に「トランス」が「推移と変容の状態」をも意味するならば、米国の軍事

的帝国主義とその多様な形態や場における帰結を憂慮する人々に求められるのは、依然として根深く続いている冷戦の地理学からの脱同一化、脱却であり、そして、もともとの地図作成者が決して意図していなかったやり方で、別の意味や実践を描きなおすことであろう²⁴。トランスパシフィックの批判的系譜学はそれゆえ、「米帝国を横断する太平洋諸島民の介入を理解する方法は、ひとつの研究分野や単一の系譜学や領域に限定される必要はない。活発で変化し続ける学際性は、私たちが「太平洋」内やそれを越えた帝国と先住性の交差を脱植民地化し、継続的に連帯・反省・修正していくことを保証する」²⁵という Camacho による見解に関わっていくことでより有効なものとなる。だが、そうした「太平洋諸島民の介入」が、冷戦体制とその構造的遺産に批判的なトランスパシフィック研究と豊かな関わりをもつためには、トランスパシフィック研究に携わる誰もが、まず、さまざまな可能性をもつが同時に危うさをもつトランスという接頭語につきまとう、忘却・横断・隠蔽を直視できているかどうかを見定めねばならない。

²³ Arif Dirlik, *What is a Rim? Critical Perspectives on the Pacific Region Idea* (Lanham MD: Rowman and Littlefield, 1998).

²⁴ Denise Cruz, *Transpacific Femininities: The Making of the Modern Filipina* (Durham, NC: Duke University Press, 2012), 8. 脱同一化の「クィア」政治については José Esteban Muñoz, *Disidentifications: Queers of Color and the Performance of Politics* (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1999) を参照。

²⁵ Camacho, "Transoceanic Flows", xxvii.